感染症の先住民族文化への影響
～トラコーマ検診に同行した思い出～

札幌市医師会
札幌医科大学脳神経外科・脳機能センター
越智さと子

軽い風邪ウィルス群の筈が、新型コロナウィルスCOVID-19の蔓延は当初の予想を超え、世界的規模となり、日常生活、経済活動、オリンピックにまで大きな影響を与えている。札医大病院でも、小学校一斉休校に対し育児中のスタッフのため、不急手術の削減を求められ、機能外科手術を延期した。担当するてんかん外来診療では、希望者にオンライン診療で処方が可能となり、災い転じた改善といえる。市中では、マスクや材料のガーゼ、ゴム紐、体温計、電池も払底している。地球温暖化による凍土融解や森林伐採が新型ウィルスの発生に関連し、ヒトの移動が蔓延スピードを速める等、いずれもヒト活動が関連する、と聞くと、便利さを求めて足を救われた感がある。イタリアで生活する日本人の関係者によると、現地での蔓延にはEU一高い高齢化率と人手不足、一帯一路路線による中国との往来増加が影響している由で、他人事ではない。まずは、ウィルスの知識や感染予防法を知り、過度に恐れず、賢く皆が自覚を持ってこの困難を乗り切るしかない。と静観する間､今年の直木賞 『熱源』を読む時間ができ、思い出したことがあった。

樺太（サハリン）アイヌとピウツスキを主人公とするこの小説は、日露戦争前から第二次世界大戦後にかけての、あまり描かれることのなかった北の辺境を舞台にしている。樺太に流刑者として渡ったポーランド人と、アイヌ人、日本人、ロシア人、オロッコ人の交流や、歴史に翻弄されつつ、誇り高く生きぬく姿が描かれている。以前よりピウツスキの蝋管は奇跡的に残されたユーカラ音源として有名で、小説ゆえの脚色や誤認も多少あろうが、なぜ記録され海外で保存されたか、経緯を知ることができた。アイヌに関する歴史書（平山裕人著：地図でみるアイヌの歴史、明石書店、2018）も確認すると、樺太-千島交換条約（1874年）の国境変更に際し、日本人となることを選んだサハリンアイヌ約840人は宗谷へ、その後石狩の対雁に強制移住となった。感染症（1886年頃、コレラと天然痘）が蔓延し、集落は大打撃を受け、慣れない地で活力を奪われて行く様子も描かれている。これは、おそらく相当の事実と推定される。世界史上、インカ、アステカ等中南米先住文化の突然の消滅には、イスパニア等の武力軍事的侵攻以上に、旧大陸からの感染原による壊滅的集団罹患の影響が大きいという。文字ではなく、口承によるアイヌ文化継承に、感染症流行も大きな影響を与えたことだろう。その責任は、むろん彼らにはない。いま、教訓として学ぶところがある。

話は飛び約50年前、中学生の私は眼科医の父に同行し、平取町トラコーマ検診について行ったことがある。お盆の二泊三日、沙流川沿い広域に散在する紫雲古津（シウンコツ）、二風谷（ニプタニ）等、詩的なアイヌ語名の小学校を、役場職員、保健師と車で廻り、臨時登校の生徒を検眼、指導する。父と一緒の旅行が嬉しく喜んでいったものの、検診中は校庭で一人。手持ち無沙汰の私を気の毒に思って、保健師の平村さんは義経神社や資料館、沙流川でのヒスイ探し等に誘い、伝承や由来を話された。日焼けした肌に笑顔はじけ活力ある女性で、地域の健康維持に深い情熱と問題意識をお持ちだった。暑い夏の午後、最後に山奥の畑で熟れたスイカやメロンを頂き、おもわず私が両手に持ってかぶりつくと、大笑い。その笑顔が目に残っている。文通し、ご自宅に伺ったこともあった。アイヌの聖地を沈めることになる沙流川ダム建設は、結局何だったか？　補償によりかえって生活が荒れていく地区住民を懸念されていた。隔てない彼女を通し、アイヌや文化に触れ、理解の窓を得たのは幸いだった。

眼トラコーマは、クラミジア・トリコマチスによって引き起こされる結膜炎で、主に子どもがかかりやすく、今でも途上国の予防可能な失明原因の第一位だそうだ。いつ、どの様に始まったか詳細は知らないが、道か町と北大眼科との経年的協力事業だったと思われる。蔓延した地域の患者数は減り、その年は偽陽性二人で最終回だった。眼疾患感染症の予防や治療に、この事業は相当有効だったろう。この数年後、突然幽明境を異にした父は、あの夏何を思って私を連れて行ってくれたのか？　大学紛争が荒れる昭和40年代、イクメン父の夏休み子づれ出張は大きな意味があった、と話しかけたいが、答えを得る術はない。今なら、大人の会話ができただろう。

感染予防で自宅待機のご家庭も多いことだろう。後になって、禍を福と変えた時代、と振り返ることができますように。日夜、感染症予防にご尽力される関係者に感謝したい。